

《論文》

若者サブカルチャーで獲得した資本の 関連産業界における活用と限界

荒井 悠介

1. 目的

本稿の目的は、都市の若者サブカルチャーの出身者たちが、自らと関わりがあるサブカルチャーの産業界に進出した後、どのようにサブカルチャーで獲得した諸資本を経済的な報酬や権力の獲得に活用しているのかを、限界性ととも明らかにすることである。

本稿では、「ギャル・ギャル男」¹と呼ばれる若者サブカルチャーに関わる産業界、通称「渋谷ファッション業界」を対象とする。その中でも、この産業界の中核を担う、かつて「ギャル・ギャル男」ファッションに身を包みながら渋谷センター街にたむろし、クラブイベントを行っていた集団「イベサー」の出身者たちに着目する。

著者は、渋谷センター街を縄張りとする「イベサー」の界である「サークル界」、および「渋谷ファッション業界」に対して、当事者として関わりながら、2001年より2022年まで参与観察とインタビュー調査を継続的に実施してきた。本稿では、その中で得られた知見を述べていく。

2. 先行研究の課題と本研究の視点

2. 1 本稿で扱うブルデュー概念

本稿では、都市の若者サブカルチャーで獲得した資本を当事者たちが、その後の関連産業界においていかに活用していくのか、その点をピエール・ブルデューの概念に依拠しながら、検討していく。

まずはじめに、本稿で扱う、ブルデューの概念について述べていきたい。本稿では、ブルデューの概念の中でも、「界」²、「資本」、「ハビトゥス」といった特有の概念を扱う。

ブルデュー概念における「界」とは、ある共通項をもった人々、および組織、価値体系、規則などの諸要素によって構成される一定範囲の社会を指す。この「界」は、「戦場」「土俵」といったニュアンスを持ち、この「界」の中において人々は、価値を与えられた「賭け金」をめぐる、闘争を繰り返す。社会には、学界、経済界、芸能界など様々な界が存在するが、本稿で扱う「サークル界」「渋谷ファッション業界」もブルデュー概念における「界」の特性を持つ、一つの界である³。

ブルデューの概念において資本とは、「経済資本」のみを指すものではなく、人脈にあたる「社会関係資本」や「文化資本」、「象徴資本」といったものも含まれる。「文化資本」とは、

文化に関わる有形・無形の所有物の総体である。これは、家庭環境や学校教育を通して個人に蓄積された知識・教養・技能・趣味・感性などの身体化されたもの、書物・絵画のように、物質として所有可能な文化的財物などの客体化されたもの、学校や試験によって付与された学歴・資格などの制度化されたもの、の主に3つに分けられる。「象徴資本」とは、名誉や威信、カリスマ性といった人々の象徴レベルに働きかける資本である。⁴

「ハビトゥス」とは、ある集団や階級に属する人々に特有な、外的に行うふるまい、主観的な知覚・評価を産み出す規範のシステムのことを指す。人々の慣習行動は、否応なくこれによって一定の方向付けを受け規定されながら、生産されてゆくことになる。本稿ではこれらの主要なブルデュー概念をもとに分析を行う。

2. 2 若者サブカルチャーで獲得する資本に関する先行研究

以下では、本研究と密接に関わる、サブカルチャーで獲得する資本を、ブルデュー概念に依拠しながら論じた先行研究とその重要な視点に立ち入っていく。

ブルデュー概念における資本と、サブカルチャーと関する代表的な研究には、サラ・ソーントンの*Club Cultures* (Thornton 1995) がある。ソーントンは参与観察とともに、ピエール・ブルデュー『ディスタンクシオン』(Bourdieu 1979=1990) の文化資本概念を援用し、サブカルチャー資本という概念を提唱した。

ソーントンのいうサブカルチャー資本とは、サブカルチャーにおける知識やクールさにとみなす資本であり、その多寡がサブカルチャー内部での尊敬やヒエラルキーを決定するというものである。クラブカルチャーでは、所有するレ

コードなどの客体化した文化資本や、洗練されたふるまい、音楽やファッションのセンス、パーティードラッグの知識など身体化された文化資本が、このサブカルチャー資本にあたる。

そして、その資本が多ければ、クラブカルチャー内部で威信を獲得するのみならず、レコード会社への就職やファッションデザイナーとしての活躍など、サブカルチャーの関連産業界で経済的な報酬さえ得られると述べている (Thornton 1995)。このソーントンの概念は、パンクやヒップホップなどのサブカルチャー界における内部の権力関係を明らかにする上で援用されてきた (Muggleton 2000) (Mitchell 2003)。

一方、サブカルチャー資本概念は用いずに、ソーントンと違うアプローチから、サブカルチャーやその産業内部の権力関係に着目した代表的なものとして、アンジェラ・マクロビーの研究がある。マクロビーは、ヒッピーの若者サブカルチャーの産業化の過程に着目し、サブカルチャーが将来的なサブカルチャー関連産業での雇用の見込みを保証することを指摘している。またマクロビーはソーントンの研究を踏まえ、クラブカルチャーの勃興により、サブカルチャー産業では社会関係資本の持つ意味が大きくなったことを指摘する (McRobbie 2002)。

以上、サブカルチャーとブルデューの資本概念を結びつけた代表的な研究を見てきた。本稿ではサブカルチャーと資本の研究をめぐる3つの課題と向き合い、今まで明らかにされていなかったサブカルチャーから得られる資本の諸相を明らかにしていきたい。

第1の課題は、ソーントンの一連の研究と、サブカルチャー資本を援用した研究の問題である。これらは、サブカルチャー資本の有効性を自明視してそのまま踏襲して使っており、概念そのものの検証が行われていないということが挙げられる。

そもそも「サブカルチャー」とは多義的に使われる言葉である。成実弘至によると、日本のサブカルチャー研究では、「サブカル」とよばれる娯楽性が高いメディア文化やその消費者に関する研究が多いが、欧米ではこうした研究は、メディア文化研究に分類される（成実2001）。また、日本国内においてサブカルチャー資本概念を用いた研究にも、北田暁大らの研究など、メディア文化の文脈でサブカルチャー資本概念を扱っているものが存在している（北田・解体研2017）。

しかしながら、欧米圏のサブカルチャー研究は、大衆文化やメディアよりも「下位集団」を扱い、社会的規範から逸脱したアウトサイダーたちを対象にしてきた。本稿でも、サブカルチャーを、社会的規範から逸脱したアウトサイダー、不良の集団文化として見る。また、そのように見た場合、ソーントンのサブカルチャー資本が指す、サブカルチャー自体への知識やふるまいなどは、サブカルチャーから得られる資本のごく一部にすぎず、他の要素を見落としているようにも思われる。

著者の今までの研究では、日本のサブカルチャーではソーントンがサブカルチャー資本とした、サブカルチャーの知識の多寡の文化資本と同様に、反社会性や性愛の利用、脱社会性に結びつく能力が、ヒエラルキーに結びつくことを明らかにした（荒井2009, 2013, 2016, 2017）。本稿では、このような不良、アウトサイダーたちがサブカルチャーを通じて獲得する資本をいかにして、サブカルチャーの関連産業界において活用するのかを見ていく。

第2の課題は、サブカルチャー資本概念自体の問題である。ソーントンはブルデューの資本の理論を援用する際、『ディスタンクシオン』を主に参照し、主として文化資本の面から検討していた。だが前述のマクロビーの指摘

（McRobbie 2002）からしても、社会関係資本、象徴資本、経済資本など他の資本も、サブカルチャーを通じて獲得する資本として重要な役割を果たすのではないか。ソーントンがサブカルチャー資本を提唱した90年代半ば以降、ブルデュー自身が晩年の00年代はじめまで活動し、象徴資本概念をより精緻化させたことも指摘できる。本稿ではこの象徴資本も含め、分析を行っていききたい。

第3の課題として、都市の若者サブカルチャーで得た資本がその後の職業世界でいかに活用されるのか、経時的な実証的な検証がほぼなされていないことである。ソーントン自身も、サブカルチャー資本はサブカルチャー産業での経済的な報酬を得られる可能性を持つと述べたが、経時的・実証的な検証までは行っていない（Thornton 1995）。

この第3の課題に答え、職業世界でのサブカルチャー資本の活用可能性を実証的に明らかにした稀有な研究には、田中研之輔の研究が存在する（田中2016）。

田中は、都市のスケードボーダーが、サブカルチャーを通じて身体化した文化資本を、その後の人生においてどのように活用しているのかを明らかにした。田中が対象とした若者たちは、主に、低賃金肉体労働者の世界に進む若者たちであるが、サブカルチャーを通じて獲得した資本による収益はほとんど見込まれないとされた。田中の研究対象は、都市に基盤を置く若者である点では本稿と重なるが、本研究の対象者たちとは進路が異なっている。また、田中の研究は、若者一人一人の進路には焦点を置いているが、同一のサブカルチャー経験者たちが職業世界で新たに形成する界には着目をしていない。⁵

これに対して、本研究では、渋谷のサブカルチャー界および、そのサブカルチャー界と連続

性のある、渋谷のサブカルチャー関連産業界への長期の参与観察とインタビューを行ってきた。本研究では、サブカルチャー関連産業界内部の微細な権力関係や経済的報酬に、サブカルチャーで獲得した資本が、いかなる形で活用され、そして限界性を持つのかを明らかにしながら、上述した先行研究の課題を乗り越えていきたい。

3. 対象と手法

本稿では、渋谷センター街を縄張りとする「イベサー」、およびそのサブカルチャーの界、「渋谷ファッション業界」に対して、当事者として関わりながら、2001年より2022年までの間に継続的に実施した参与観察とインタビュー調査を通じて得られた知見を述べていく。

本稿の調査対象は、東京都の渋谷センター街を主な活動拠点としたイベサーのメンバーとその引退者である。調査方法は、参与観察とインタビューを中心としたエスノグラフィーである。分析資料としては自らが作成してきたフィールドノーツとインタビュー資料を中心に扱う。著者は2001年から2003年まで調査の目的を持って渋谷のイベサーに当事者として参加し、2004年以降は調査者として渋谷のサークル界および、渋谷ファッション業界へのフィールド調査を行っている。

また、調査者としての立場に加え、ギャル・ギャル男ファッションに関わる渋谷のサブカルチャー産業界の複数の企業、団体に関わり、界の中でも人間関係をつなぐ役割を2022年現在まで引き受け続けている。そのような属性を持つゆえ、調査協力者が当事者としての著者に配慮した発言をしている可能性があることも、予め記しておきたい。

また、調査にあたっては2004年以降いずれの

対象、立場においても、自らの立場をギャル・ギャル男文化の研究者として伝えることを心掛けている。また、インタビュー資料として使用する際には本人からの許諾を得ている。なお、研究協力者の年齢、属性は調査時のものである。ただし、本研究では、研究協力者、団体の特定を防ぐことを最優先するため、研究内容に支障がない範囲で、意図的に属性や詳細な時期を記載しないことや、一人の話者の発言を複数の話者による発言として分けるという加工を行っている。

4. 「サークル界」

本稿では、主に「サークル界」と「渋谷ファッション業界」と当事者たちが呼ぶ界のメンバーを対象とする。本研究では、ギャル・ギャル男ファッションをする若者、その関連産業界に関わる者を対象とするが、まず、「イベサー（サークル）」とは、何かを概説したい。この「イベサー」とは、年に数回、流行りのダンスミュージックを流すダンスタイムと、パラパラショーなどのアトラクションからなるクラブイベントを行い、普段はストリートにたむろしている集団である。イベサーは複数存在しており、各集団同士でライブを形成し、いわば「サークル界」⁶という独自の社会を作っている。

この集団は、日本の都市の若者サブカルチャーの系譜に属する集団であるが、特に強い関わりを持つのが、都内の有名大学を中心としたインターカレッジ（インカレ）のイベント系サークルと、その後輩である都内の有名私立高校生から構成される、渋谷カジ族やチーマーである。このインカレイベントサークル文化と、チーマー文化が混ざり合い、渋谷センター街を起点に活動を行うイベサーと「サークル界」が形成された。

彼らのサークル界と他のインカレ系イベントサークルは分かれており、それを分かつ要素としては、ギャル・ギャル男若者サブカルチャーとしての、ファッション、価値観、行動様式をもつこと。そして、暴力団と交渉できる「ケツモチ」いう名の管理者を置き、ケツモチごとに系列とよばれるグループが組織され、複数のケツモチによって主宰される合同イベントに参加していることが挙げられる。こうしたイベサーに属する者たちは、「サー人」と呼ばれ、「大サー」と呼ばれる高校卒業学年以上のメンバーが所属するグループと、「高サー、youth」と呼ばれる高校在学学年の若者が所属するグループ、女性のみによって構成される「ギャルサー」に分かれている。彼らは高校三年生、または大学三年生の後半になると、イベント中に「引退式」という卒業の儀礼を行い、この世界から抜けていく。

サー人たちの活動目的は、基本的にサークル界およびギャル・ギャル男系の若者の中で「イケてる」ことの承認や威信を集めることである。筆者のこれまでの研究では、イベサーのメンバー（サー人）に共有されている4つの価値観と、その価値観が彼ら自身の将来との結びつきのなかで、どのような意味を備えているのかを明らかにしてきた（荒井 2009）。彼らが持つ4つの価値観としてはまず、コミュニケーションを中心とした労働への勤勉性を示す「シゴト」という価値観が存在している。加えて、社会規範から逸脱したサブカルチャー独自のものとして、3つの価値観が存在する。「ツヨメ」という脱社会的な発想や行動力、既存の常識にとらわれず新規性のあるものを取り入れるという価値観、「チャライ」という、感情に流されず戦略的に異性愛を利用するという価値観、「オラオラ」という、逮捕されない範囲での法的な逸脱や、暴力の利用を行うという価値観で

ある。そして、これらの価値観に基づく能力を持つことが、サークル界および、ギャル・ギャル男系の文化における威信や承認、すなわち「イケてる」ことに結びつくのである。この「イケてる」ことは、自分たちの単独のイベントにイケてる若者をより多く集客し、合同イベントで多くの納金をし、自分たちのグループのメンバーを高い役職に就かせること、これらを通して、証明され、揺るぎのないものになっていく。そして、最終的にサー人たちは、先の4つの価値観に結びつく能力を持つことが、将来の社会的成功にも役立つと認識しているのである。

また、彼らはこのイベサーという、サブカルチャーでの活動が、将来の社会的成功に結びつく、文化資本・経済資本・社会関係資本・象徴資本という資本を得ることにつながると捉えている（荒井 2016, 2017）。

本稿では、このような若者の中でも、とりわけ渋谷ファッション業界と彼らが呼称する、ギャルギャル男ファッション関連産業界に進む者たちを対象としていきたい。

5. サブカルチャーで獲得した資本の活用

5. 1 サークル界との親和性と適性

「渋谷ファッション業界」とは、ギャル・ギャル男系サブカルチャー関連の企業とその界を、当事者たちが呼ぶ名称である。アパレル会社、モデル事務所、マーケティング会社、イベント会社、広告代理店、雑誌社、美容・化粧品の小物を扱う業者など多岐にわたる。このギャル・ギャル男関係の企業は必ずしも、イベサー出身者だけではなく、サー人が進出する以前より存在していた企業や、イベサー出身者ではない経営者も存在する。しかし、00年代前半から

イベサー出身者が進出し、仲間で起業するようにもなり、この界の中核を担っていった。⁷

渋谷ファッション業界は、サークル界と親和性が高い。もちろんビジネスであるため、企業も労働者もサークル活動の延長とは捉えないが、働く人間の層や文化はイベサーと親和的なため、サー人が積極的に雇用されている。

企業規模の拡大や専門職が必要でない限り、公募での人材募集はあまり行われず、基本的にはもともとの人間関係と信用で採用が決まる。サー人が起業した企業や雇用されている企業では、サークル界出身者の雇用が多くなる。なぜそうなるのか、彼らの資本との関わりで見てみよう。

サー人が雇用される際は、その企業にいるサー人関係者が探すことが多く、同じサークル、系列、合同イベント、サークル界と、距離の近いものから人材が求められる。現役時代からアルバイトやインターンの形で、その企業と関わることもある。

採用面接の前段階でサー人関係者や採用担当者との会い、そこで話をする中で採用が決まることが多い。会社の雇用条件や職務内容、本人の人柄を世間話のようにする中で、事実上の採用が決まる。転職の際もほとんど同じで、元々の知り合いの会社で働いたり、知人に紹介される場合もある。

その際の判断基準は、一般社会とさほど変わりはないものもあるが、渋谷ファッション業界ではあまり学歴は重視されず、現役サー人の頃の人間性の評判と、サークルを引退までやり切ったかどうか、そしてサークル界での地位の高さが評価される傾向にある。

評判の中でも、職務上異性に対して禁欲的にふるまえることは、重要な判断基準になる。渋谷ファッション業界では、ギャル男よりギャルのマーケットの方が大きく、職務上も華やかな

女性と接することが多い。モデルとの付き合いは必須の業界であり、所属事務所とのトラブルは避けねばならない。そのため、特に男性は仕事上は異性に対し禁欲的にふるまい、人間関係を築くことが重視される。それができないと判断された者は雇用されない。実際に異性関係でトラブルを起こし、その企業から去る者もいる。異性愛に禁欲的であるというハビトゥスが、サブカルチャー産業界の仕事においても求められるのである。

次に、サークルを引退までやり切ったという実績は、サー人としての資本を保持する幹部クラスの証しにもなる。その人間が（サークル界と親和性をもつ）渋谷ファッション業界の組織で、最後までやり切れるか、彼らが共有する文化の中で「とぶ」ことがなく、「筋を通せる」人間であるかを判断する重要な指標になる。

サークル界での地位の高さは、渋谷ファッション業界に入っても、仕事や人間関係を円滑に進めることに結びつく。サークル代表や合同イベント役職者の肩書は、サー人としての資本総量を証明する上に、下の者をまとめる力があること、またギャル・ギャル男とうまく業務上接する能力があることの証明になるのである。

合同イベントの役職者であったことは、その後の人間関係を通じた資本の拡大にも結びつく。渋谷ファッション業界での仕事は、他サークル出身者との繋がりで行うものも多く、もともと顔が広い方が仕事がしやすく、顧客やアルバイトの現役サー人とのパイプもある。社内のインフォーマルな付き合いに加え、他社主催のレセプションや展示会、イベントをはじめ、忘年会、新年会、誕生日会、パーティーなど大小様々な付き合いがあり、いくつもの現場を移動することも少なくない。それはまさに、現役当時のイベントやナゴミとも通じる。そこに顔を出し人と繋がるには、元々合同イベントに参加

していたサークル時代の外交役であった者が適している。勤務時間外に参加することもその場での対応も、イベサーでの「シゴト」で身体化できている。しかもそのような場合は、元々の知り合いに会う場所にもなるので、全く馴染みのない者より精神的負担も少なく、仕事のパイプにもなるのである。

サークル界で外交をしていた者は、「筋の通し方」も熟知し、また自分の名前が知れ渡っている分、名誉を大事にする。そのため他人から信頼を損なう行為の恐れが少なく、give & takeもわきまえている。こうした感覚はこの界にも通底し、「俺、（金でなく）信頼で人を紹介するんです、絶対不義理だけはしないように。目先の利益にこだわらずに、まだ種まき段階なんで、信頼の積み重ねですからね」⁸といった言葉にも表れている。実際に一つの企業の中でも、外部と繋がることが多い役職の者は、現役サー人時代に合同イベントで統括などをしていた者が多く、彼らとは多くの現場で頻繁に顔を合わせることになる。

5. 2 資本とヒエラルキー

サー人としての資本やその歴史の古さは、渋谷ファッション業界でのヒエラルキーと職務上の評価に結びつく。仕事や社会関係資本以外にも、どのような資本が評価に結びつくか、また逆に評価を下げるのかを見てみよう。

渋谷ファッション業界は、ギャル系ファッションとの結びつきが強い。そのためファッションの文化資本が高く、外見が良い者は、高い評価を得る。ギャル系のモデルやモデル出身者は、その外見の良さとファッションの文化資本、象徴資本の高さを評価される。この業界ではモデルは専業でなく、ビジュアルプレスや一般業務と兼業する者が多い。彼女たちにはモデ

ル業界での人脈もあり、個人のインフルエンサーとしての能力も高い者が多い。カリスマ性を持つモデルは顧客から憧れられ、顧客を呼び込み、企業のブランドという象徴的価値を高める。男性モデルも女性モデルほどではないが、同様である。

チャライに関しては、異性愛の戦略的な利用以上に、職務上異性に対して禁欲的にふるまうという側面が評価される。「ナミは男ですよ、都合が悪くなったら女使ったりしませんから」⁹など、女性も男性のように働くことが評価される。ナミはインフルエンサーとして評価の高い、人気モデルのサー人出身者であり、モデル以外の業務も行っている。このように、外見が良く、プライベートはどうあれ、職務上は性愛感情を惹起させないことが評価されている。

逆に「都合が悪くなると女を使う」ような女性は卑下される。渋谷ファッション業界では、少なくとも仕事中は性愛が介在しないことを、他の環境以上に重視する。そのため、仕事関係者と性的な関係を持った者なども、男女問わず軽蔑され「ダサイ」こととして忌避される。

しかしながら、厳格さを守れない者もあり、中には仕事関係者との関係を持つ者もいる。女性の場合、仮に顧客などと関係を持ってもトラブルになることは少なく、すぐに職を失うことはあまりないが、男性の場合は厳格な処罰の対象になり、役職に関わらず失職の原因になる。「やったら（性的な関係を持ったら）マネジメントできないよ」¹⁰というように、基本的に顧客は女性主体のファッション業界であり、モデルや女性の社員、顧客も多い業界のため、マネジメントやモデル事務所とのトラブルの防止、業界内や顧客へのイメージ低下を防ぐためにも、処置は非常に厳しい。この業界で働く女性も立場がある者ほど、自分の価値を低く見られカリスマ性を低下させないため、外見の良さを

保持しつつも、職務上は禁欲的にふるまい、他者からも性愛の対象から外れるようにふるまう。

ツヨメに関しては何より、ギャル・ギャル男文化関連のファッションのトレンドやインフルエンサーの人気など、潮流を捉えるセンスが評価される。例えばギャル系の若者の興味がロサンゼルスなどの海外志向になっていることがわかれば、すぐにそのプロジェクトを作り、インフルエンサー志望の者が増えていけば即座に志望者に対応する。インフルエンサーやモデルの発掘にも、こうしたセンスが発揮される。新たなものを見極めるセンス、すなわちサブカルチャーの文化資本は、互いに蓄積し続けた者同士でないと通じ合えない認識・評価の感覚である。このセンスを持ち合わせた者たちが、新規ビジネスを展開する。

オラオラに関しては、「この業界、不良や不良あがりの人間が多い。だから多少相手側の腹も探らないと、昔みたいにハメられたり（金銭を要求されたり）することもあるから、それなりに神経使ってやないとね」¹¹と指摘がある。このように、サー人を含む不良上がりや、犯罪を通して経済資本を蓄積して参入する者たちも多いため、リスクヘッジのためにも用心深さが要求される。また、ステルスマーケティングを生業とする企業や、法的にグレーゾーンの形でこの業界に関わる者たちもいる。ステルスマーケティングは今では一般にも知られるが、2010年頃はまだ新規の「ツヨメ」なもので、厳密には軽犯罪法で捕まる可能性もなくはないが、逮捕されない範囲の「オラオラ」でもあった。そうした企業に関わる個人のモデルや企業も多く存在しており、何らかの形でサー人としての資本を投入する者たちもいた。

5. 3 歴史による正当性と「イケてるヒエラルキー」

ここまでチャライ、ツヨメ、オラオラと、サークル界の諸資本に即して見てきたが、それらとともに重要になるのは、過去の経歴という象徴資本である。以下は渋谷ファッション業界のプレス、マサトの発言である。マサトは元大規模サークルの幹部クラスであり、合同イベントでも重要な役職を担っていた。中学時代から目立っていた人物でありオラオラな者たちからも信頼が厚い。自分自身も最先端のファッションに身を包む、ツヨメでオラオラなサー人であった。渋谷ファッション業界においては、広い人脈を持ち、信頼されている。現在は最先端の流行を掴むセンスで、複数の企業から委託を受け新規事業を推進している。¹²

「イケてるヒエラルキーってあるじゃないですか、昔イケてたかイケてなかったかって指標、あれ俺凄く重要だと思うんですよ……やっぱ、昔イケてなかったみたいな、イケてない人がやると絶対ダサくなると思うんですよ。……社員も一緒にダサイ人がやるとダサイ組織になると思うんですよ。まあ、IT（業界）とかじゃあ、いいのかもしれないですけど、うちみたいなファッション（業界）じゃあ、ありますよ。こういう環境って昔からイケてたかどうかですごい重要だと思うんですよ。やっぱイケてるヒエラルキーって大きいと思うんです。イケてないと（人が）付いていかないっていうか、無理があるんですよ。イケてた人の上にイケてなかった人が立つって……モエは絶対一生ナミには勝てないじゃないですか、そういうことです……俺年末に10年ぶり位で高校の同窓会があったんで

すけれど、いくら今すごい仕事していても、やっぱり昔、ヒエラルキーで下だった奴って、いつまでたっても下なんですよ。(その中では)」

渋谷ファッション業界にありながら、イケてない人間が上に立つことは、イケてる顧客や社員たちの承認を得られず求心力を持ちえないことにつながり、企業のブランドイメージの低下にも結びつく。また同窓会の例から、昔の経歴がスクールカーストと同様、彼らの認識の中ではずっと(「一生勝てない」)続くものとされる。

実際に渋谷ファッション業界はサークル界と同様、過去の歴史が重要な意味をもつ。その人間が「イケてた」こと自体がこの業界では、その人間の人物や資本の正当性を測る指標となる。いくら現在その人間がこの業界に溶け込もうとしても、過去の経歴がなければ認められるまでに苦労することがある。

マサトが揶揄するモエは、イベサー出身者ではなく、インカレのイベントサークルに加入していた者であったため、周りからは粋がっている一般人として侮られていた。また、業界の参入当時はギャルメイクがあまりうまくはなく、周囲の人間にもそれを揶揄されていた。モエのように「ギャルじゃなかった」のに業界に入りギャルになろうと必死な者など、「デビューが遅かった者」や若者サブカルチャー時代の経歴が低い者が批判的にみられ、その判断基準はサークル界の頃と相同である。「ミーハー」な「リア充アピールをする」者などはよく揶揄されるが、「客や身内とやる(性的な関係を持つ)」、「妙に威張ったりオラ付いたりする」といった、サブカルチャーのハビトゥス形成が表面的にとどまるとみなされた者も、批判の対象となる。こうしたことは、組織運営やビジネス

上もマイナスに働き、周囲から顰蹙や批判の対象となり信頼をそこなう。特にその人物の過去の経歴を知る者は、そう判断することになる。

逆に現在、いくら落ち着いた外見や言動をしていても、過去の経歴を知られると、相手が一瞬で態度を変えることも多い。元有名サークルの幹部クラスだと知るやいなや、異性から侮れないよう気を張り敬語も使わない女性モデルなどが、突然敬語になったり態度を軟化させたりして、結果的に取引が円滑に進むことなどもある。この業界では過去の経歴を持つ者が承認され、資本を拡大させていくという面があるといえるだろう。

5. 4 資金、暴力、勤勉さ

この渋谷ファッション業界には、イベサー時代の後輩や仲間と共に、特殊詐欺などの非合法な手段でスタートアップ資金を稼ぎ、その資金を元手に、その後プロダクションや他の企業を巻き込んだ興業、ガールズ向けweb事業などに乗り出す者たちもいる。彼らの中には、非合法的な形で大きな経済資本を手にし、かつてのサー人の後輩をオラオラさで事業に協力させ、事業を拡大していく者も多い。

また、かつて自分たちで合同イベントを開催し、他のサークルを無理やり参加させて金を払わせていたサークル出身の者は、その時と同様に多くの企業を集めるイベントを行う傾向にある。そのためサークル界のオラオラサークルの元メンバーからイベント協賛を求められても、「俺昔、〇〇にしろって、(追い)詰められたからね、マジ、嫌なんだけど」¹³とサー人であることを隠したり、担当者を変えて避ける者もある。

クロカワは、大学時代にはオラオラ系イベサーの幹部クラスとして、合同イベントでも高い

役職にあった。クロカワは周囲をオラオラ系のメンバーで固め、現役時代は強引な口口で自分の引退式を合同イベントの形にして、他サークルに納金させていた。その後フロント企業を立ち上げ、サークルの後輩に性風俗・アダルトビデオの出演者のスカウト、架空債権詐欺などをさせて金銭を稼ぐ。その金を元手に化粧品販売を開始、その後ギャル系の通信販売webサイトを立ち上げ、広告塔にかつてサー人であった人気読者モデルを使って大きな収益をあげ、渋谷ファッション業界の他の企業も巻き込んだ大規模な興行などを行う。また、ギャル系の芸能プロダクション業務など、多岐にわたる業務を展開した。「今は年商20億、〇〇（「勝ち組」の象徴とされたビル）に住んで、ベントレーに乗っている」とかつてのメンバー、ヤスは言う。

以下はクロカワのサークル界の後輩で、モデルプロダクションを経営する人物、タニガワの発言である。¹⁴

「（クロカワが）いちゃもん付ける理由が、俺がマルオにタメ語使ったからとかそういう問題だぜ。俺がスカウトした子（モデル）が、たまたまクロカワさんのところのマルオ（社員）と繋がってたらしいんだよ。繋がってたっていってもちゃんと契約結んでたわけじゃないんだぜ。……でマルオが上等こいてきた（威圧してきた）のよ、（マルオの方が年齢は上だが）元々系列の代でいったらあっちが下（の代）なんだし、あっちが上等こいてきたんだから、関係ねえだろって思うだろ。（クロカワが）今から会社来いとか言ってきて、行ったらジュンジ（元オラオラサークルの武闘派メンバー）たちにとり囲まれて、傘下に入れてって言って、脅しかけてきてさ。……であまりにもうざいから俺もA（非常にオ

ラオラだと評判の芸能事務所、発言者と協力関係）出したのよ、そうしたら、「いえ、こっちもタニガワの口の利き方がなってないから注意しただけで……Aさんところと揉めるつもりはありませんみたいに、引きやがって」……なんなんだよあいつ今だに先輩ヅラしやがって、そもそも俺一度も世話になったことないからね、マジウゼー」

このようにクロカワは、現役時代の自らのオラオラな象徴資本を十分に活用しながら、チャラさやオラオラさツヨメさを持った後輩という社会関係資本を利用して、経済資本と象徴資本を獲得しているのである。¹⁵彼はサー人から成り上がった一つの例と言える。彼のオラオラさはサークル界出身者に限られた面もあるが、サー人関係者には象徴資本が通用し、サークル界の規範でなにかと要求がつく。そのため渋谷ファッション業界で働く者は、彼のような経済資本とオラオラな象徴資本を持つ者に搾取されやすい構造におかれるのである。

ただし、彼の会社の成功はこれらの資本だけが理由ではない旨を、かつて彼と働いたメンバーヤスから指摘された。ヤスは、自分自身がクロカワとともに会社を運営している際、「全国の〇〇（量販店）に（その商品を）置くために鬱になるくらい働いた」と著者に語った。

これはまさに、勤勉に組織のために滅私奉公するイベサーのシゴトの精神にも合致する。最終的に彼は、「鬱でなにも出来なくなって辞めた」が、自らの心身を犠牲にして勤勉にシゴトに尽くす会社の風土を創出し、それを当然視するハビトゥスを内面化した社員がいたことも、会社の成功要因であっただろう。イベサーと相同的な構造と精神性をもつ組織をサー人たちは作り出し、そのような精神性を職業世界でも発

揮していくのである。¹⁶

6. サブカルチャーで獲得した資本の限界

6. 1 経済資本の強さ

これまで述べてきたように、渋谷ファッション業界では、イケテルというサブカルチャー文化資本、昔からイケていた歴史をもつという象徴資本、社会関係資本などを保持することで、仕事において実際の収益に結びつけられ、企業内の人間関係でも卓越化ができる。

だがこの界の中でも、最終的に力を持つのは、経済資本を持つ者である。そのため彼らが下に見ていた、自分よりイケてないサー人や一般人でも、結局は経済資本を持つ者が、この界でも優位に立つ。

実際に、リキとテルが、渋谷系ファッションの会社に知人の元サー人を紹介することになった際、以下のような会話がなされた。¹⁷

リキ 「俺、あいつ、だいい嫌いなんだけど、まあ仕事できるし、(紹介する元サー人の) プラスになると思うから紹介するわ」

著者 「誰ですか？」

テル 「ナルオミ、ああ、元〇〇の代表、あいつ俺もサークルやってる頃から嫌い、なんなのあのちょづきかた(調子の乗り方)(笑)なんかだせーけど粋がってるやつ、でも何個か〇〇とかの会社持っている社長」

リキ 「しょぼいのに粋がってるやつ、偉いからね」

著者 「しょぼいのに偉いんですか？」

リキ 「荒井さん(著者の名前)、お金を持っている人が偉いんです」

ナルオミはサークル界の有名サークルの幹部クラスであったが、リキとテルより年齢は年下で、サークルの勢力はテルのサークルほどでなく、リキほど現役時代に有名ではなかった。テルいわく「なりそこないのギャル男、あんまりぱっとしない奴だった」。サークル界のヒエラルキー上は明らかに、リキとテルが優位である。だがナルオミはビジネスの世界では非常に有能であり、仕事もできるため順調に出世をしている。

対人関係上はあまり表面化しないが、リキの「お金を持っている人が偉いんです」の言葉どおり、たとえサブカルチャーの経歴に優劣があっても、結局は経済資本を持った者が、渋谷のサブカルチャー関連産業界でも力を持ち、企業の中ではより顕著に、その経済資本を持つ者(経営者)が優位に立つことになる。

6. 2 派閥の形成と価値観の対立

サブカルチャーに通じた資本を持つ元サー人や読者モデルなどは、それぞれに仲のよいコミュニティを作り、プライベートでも人間関係が結びつきやすい。共通の友人や話題、世界が重なる人間も多いため交流が頻繁であり、ネットワークや派閥が形成されてくる。こうした派閥から、一般人出身者との間に軋轢が生まれる場合もある。

また、人間関係的な軋轢はどこにでもあるが、サー人と非サー人の間では、若干文化的な価値観も異なる。サー人の価値観は一般と異なることもある。例えば広告媒体として、水商売の女性向け雑誌に広告を出すことなどへの抵抗感のなさである。また現役サー人時代に行っていた、キャバクラなどの仕事を企業関係者が行うことや、行っていた者の人材登用への抵抗が少ない点である。サークル界や若者サブカルチ

ヤーでは当たり前な価値観や倫理観をもとにし、かつそれが収益に結びつくなら、積極的にそのような行動を行うのである。

また、多少過去に法的にグレーゾーンの経歴をもつサー人や、なんらかリスクを抱えるサークル界の者でも、その人間が信用でき利害が一致するなら、協力関係を結ぶことに抵抗が少ない。赤の他人でなく、サークル時代から信用がある者同士の場合、裏切りや不利益を与える行為をすれば、噂がすぐに広まり、自分が不名誉や損失を受けることになる。そのため、ある程度有名なサークルを引退までやり切った者は、「筋を通す者」として信用を得る。評判のいいサー人同士は信用ができるため、サークル時代からの社会関係資本を積極的に活用し、それを仕事に活かしてゆく。逆にたとえ社会的な信用があっても、その人間がサークル界時代からの信用や評判の低い者なら、取引を躊躇する。サー人が社会関係資本を利用する際は、法や経歴への信用性よりも、その個人の人間性や信用をもとにリスクを判断し取引を行うのに対し、一般人は法や経歴による信用性を重視するのである。

このように渋谷ファッション業界においても、サー人出身者をはじめとしたギャル・ギャル男若者サブカルチャーに関わった者と、そうでない者との間では、美意識や価値観にズレが生じる。広告媒体、人材登用、取引先の選択などにも、意見の対立が生じうる。また新規の流行をつかむことに長けたツヨメな者たちが、SNSに対応した施策や、人気上昇中のインフルエンサーを一足早く登用したがるのに対し、一般人は遅れがちになる。また、異性との関わりなどでも厳密な価値観を持つサー人と非サー人の間では感覚がずれやすく、揉めて離職の原因になることもある。

6. 3 サー人の資本による軋轢

サー人と非サー人との価値観の違いから、派閥が形成され意見が分かれることも多いが、渋谷のギャルカルチャーが隆盛した10年代初頭までは、この種の対立はそこまで表面化されなかった。だがそれ以後、ギャル・ギャル男系サブカルチャー関連産業界自体が規模を縮小し、企業の収益も減少して多くの企業が倒産し、リストラや現場責任者の変更を進めた。そうした中、サー人と非サー人の派閥対立が表面化してくると、最終的に力を持つのはやはり経営者や企業責任者とその派閥となる。

以下ではそうした派閥対立と人間関係がもって、経営側の人間との軋轢から企業を去る者たちの声と、そこから見えるサー人と非サー人の違いに焦点を当ててみよう。

なお、以下の例はいずれも、元大規模サークル幹部クラスメンバーで、渋谷ファッション業界に10年以上勤務し、2015年以降に離職した、30代男性のものである。聞き取りは2015年から2021年までの間に行ったものを記載している。この業界は個々の企業規模が小さく、企業内や企業間で業務を兼務する機会が多いため、業務内容について述べている際は、特に本人と関わりが深かった業務について述べている。なお、関係者と企業、時期の特定を避けるため、文脈を損なわない範囲で意図的に詳細を伏せている。

①人間関係の構築の違い

以下は、リュウゴが勤務していた企業を辞めるきっかけと、非サー人の会社責任者の話である。

「(上司が) 梯子外すようなまねしやがって
……もうそれで、マジでありえねえって思

って（離職をすることにした）……仕事自体はやりがいがあつたし、続けようと思った、業績も上がってたんだ……でも、もうさすがにやってらんないって思ってね。……（上司は）ずっと誰にも慕われず辛かったんだろうな……元々あんまり友達いる人じゃないし、俺たちみたいに後輩の面倒をみてきた経験もないから後輩との接し方もわからない……この業界のこともよくわかんない……結局のところ、うちの会社、俺と〇〇みたいなやつら（サー人）で全部まとめて、他の社員もバイトも、俺たちの周りだったからね」¹⁸

「梯子を外す」は、役職や地位を与えておきながら、態度を変えて孤立させたことを指している。それ以前も様々な軋轢はあつたが、この梯子外しがリュウゴの離職を決意させた。納得がいかないが、「企業判断」だと言われると何も言えないと語る。梯子を外す行為は筋を通さない、上司が責任は取らない行為であり、サー人の世界では否定的に捉えられる。

IT企業に進んだ者にも、子会社の社長を任されながら「梯子を外され」、「社会って僕が思っていた以上に本当に怖くなってしまいました」¹⁹と離職経験を語る者や、一般企業の元サー人上司に対し「うちの社長は梯子外すような真似絶対しませんから」²⁰と、人物評価に用いられるケースがある。サークル関係者において「梯子外し」は、そもそも想像しがたいものとされる。特に幹部クラスのメンバーたちは、ケツモチとの関係でもサークル内の関係でも、自分の部下や関係者への責任感を根強く身体化していた。彼らの上司との関係でも（たとえ長期の展望に根付いてなくても）、責任ある関係を当然視しており、特に下の者には上の者が責任を取るといった価値観を、幹部クラスの間はハ

ビトゥスとして刷り込まれている。そのため、「梯子外し」には一般人以上に想像がつかず、拒否感を覚えてしまう。サークル界でのハビトゥスを強く内面化したからこそその脆弱性もあるといえるだろう。

また、リュウゴは上司が、元々あまり友達もいないことに加え、イベサーのような集団に入ったことがないため、後輩の面倒の見方や接し方がわからない様子を伝えている。イベサーのナゴミやシゴトのような経験がないため、上司がうまくコミュニケーションをとれていないというのである。渋谷ファッション業界という、ギャル・ギャル男出身者が多い環境では、ギャル・ギャル男系の間人との関係構築は不可欠になる。渋谷ファッション業界への文化資本や社会関係資本も、サー人の社員たちと比べ乏しいリュウゴの上司は、彼らとの関係がうまく構築できず、その不満が軋轢を生んでいたとリュウゴは語っている。

②人脈や情報の価値への理解の違い

次は、ケンゾウが長年協力していた業務提携先の人事異動で、一般人出身者が経営責任者・担当者になり、報酬の減額を要求された時の発言である。

「情報の価値がわからないんですよ。俺へのたった〇〇万、今までの情報や人脈がわからないんですかねって、もう辞めたら一切教えるつもりもないですし、知り合いとかも絶対紹介しません。……3日前に外部からレセプションのゲスト呼んでくれて言われて、僕、すぐにつなぎました。（相手企業の）〇〇さんに連絡して、上から直接（話を通してもらいました）です。（会社の社長の元サー人が）タメなんです。……（会社の経営責任者に）今までは、最近こ

の子、きはじめていますよ（フォロワーを増やしはじめています）とか、インフルエンサーの情報とかも教えてましたが、絶対に教えません。そういうのって本当に業界内の色々な人と付き合う中でわかってくるものじゃないですか。……元々イケてないからそういう情報がどのくらい価値があるかわからないんです。……（会社の担当者）「109にビラ入れられませんか？」って言われて、それ聞いた瞬間は「は？」ってなりましたよ、出来ますよ（笑）もちろん繋がってますから、でもマジかよって（笑）この時代に？いいですけど（笑）、本当にセンスないし、ダサいんですよ。……それで、月〇〇万が高いって、上（経営責任者）が言わせてるんでしょうけれども。だからもう終わりにします、さすがに無理ですね。……ただちょっとむかついたんで言いましたよ、じゃあ、レセプションの3日前に〇〇（人気で多忙の有力インフルエンサー）呼べるんですか？って（笑）……こっちが長年かけて作ってきた人間関係、その価値がわからない」

ケンゾウがこの企業と関わり行ってきた業務には、企業のブランディングとしてのメディア戦略や、イケてる人材の紹介なども含まれる。そんな中、人事異動で企業の担当者と経営責任者が変わり、報酬の減額が要求される。ケンゾウによると、以前も報酬の減額はあったが、企業の経営状態と人間関係があったため、良い条件でなくとも協力を続けてきたという。

だがケンゾウと直接関わる者が、理解の少ない一般人になって、ケンゾウがサークル時代とこの業界で培ってきた人脈、すなわち社会関係資本や、それらを通じて得られる文化資本の価値が理解されなくなってしまう。

ケンゾウが「元々イケてないから情報の価値がわからない」と述べるように、ある程度渋谷ファッション業界での資本を持つ者でないと、ケンゾウが紹介する人材がどれほど象徴資本をもつ人間か、またケンゾウの人脈と、新しい流れをつかむツヨメな文化資本を通して捉える流行、インフルエンサーをつかむことの重要性は、理解できないのである。

通常なら突然呼べないようなインフルエンサーをケンゾウが招致することで、ケンゾウの取引企業は、象徴的な資本を得ることができた。ケンゾウの昔からのコネや協力関係があるおかげで、職務の遂行が円滑化している。渋谷ファッション業界では関係者用の値段が提示されることがあり、ケンゾウのような関係者が中に入れば、経済的な利得も得られることが多い。しかもこのような仕事を続けられるよう、ケンゾウは普段から自ら資金を出し、休日や業務外の時間も頻繁に業界内の集まりに顔を出して人間関係を構築し、得意先企業の利益になるようインフォーマルな労働をしているのである。

だがケンゾウは、こうした努力が得意先企業に理解されず、対価が彼の労働に見合わず、あまりに安く搾取的だと捉え、「もう終わりにします、さすがに無理です」との結論に達した。

サブカルチャー関連産業界における文化資本や社会関係資本の価値、その理解の度合いと捉え方の違いから、ケンゾウの労働価値は正当に評価されず、労働に見合わない対価しか提示されないことで、軋轢が生じていたのである。²¹

③組織内の権力

リキは、サークル界でも非常に勢力をもったサークルの代表で、合同イベントでも高い役職を持った。ハンサムな顔立ちと評判であり、ファッションセンスもよく、ギャル系の若者の新しいトレンドを掴むことにも秀でている。サー

クル時代からの人脈も広く、彼により多くの社員が雇用され、部下や取引先からの信頼も厚い。彼はその資本を活用し、顔が広くセンスがいい、仕事ができる有能なプレス担当者として業界ではよく知られる。彼の企業では彼を中心に、モデルやインフルエンサーを起用したブランディングとイメージ戦略を打ち出し、業界の隆盛期もそれを過ぎた後も、新しくセンスのあるプロモーションの効果は大きく、彼の仕事ぶりは有名だ。

だが彼の企業ではギャル系ファッションの衰退とともに、顧客を一般層に拡大しようと企業内改革が行われ、ブランドイメージに変化が起きた。彼とそりが合わない非サー人の経営者側と揉めたことで、彼は組織の中核から外れ、意見が反映されなくなり、離職を考えていることを私も聞いていた。

彼と出会った展示会では、今まで彼とともに来ていたビジュアルプレス²²の女性や、男性サー人上がりのプレス担当者ではなく、およそ渋谷ファッション業界には似つかわしくないファッションの男女が来ていた。その帰り道、彼から現在の職を離れることを直接話された。

著者 「リキさんがいなくなって回るんですか？……プロモーションもイメージ戦略も全部リキさんや、〇〇さん（元男性サー人）が手がけてらっしゃいましたよね。正直……イケテル方が回さないとイケテルブランドにならないと思うんですけど」

リキ 「最近うちイケてないもんね……あの二人が新しい幹部。あの二人に挟まれて、人前で挨拶することがあって。それで、もう駄目だ、やっていけないって思った。……ただね、組織としては悔しいけれど、回ると思

うんです。今回のことで思ったんだけど、この業界も組織も変化があって、それが今なんだなって」

著者 「リキさんが離れるってことで、凄くモチベーションを下げる方がいらっしやると思うんですけどね……」

リキ 「ああ、たしかに、（リキの経営者側の人間）凄く根回しとかもなくって、人の気持ちとか全く考えていないと思うからそういうのは、全然駄目だなって思ってるんです。荒井さんが言ってくれたみたいに、モチベーションを下げてくれていいですよ。だって人と人との繋がりなんだから。ただ、今回ので色々考えさせられたね……とはいえ、新しい事業をもう考えているんです。新しいビジネスを〇〇（元サー人）とか〇〇（元サー人のモデル）とかと一緒にね」

リキはこの数年前に、「荒井さん、お金を持っている人が偉いんです」と語っていた元サー人である。今回の離職に際しても、「この業界も組織も変化があってそれが今なんだなって」と、やや達観した様子で語った。彼自身は、経営者側との比較ではもちろんのこと、渋谷ファッション業界全体でも、社会関係資本も文化資本も象徴資本も、高く保持している。仕事の能力も高いと組織内外で評判であり、ギャル・ギャル男系サブカルチャーの隆盛期を過ぎた時期においてもなんとか彼の企業がもちこたえたのは、彼のおかげという声も聞こえるほどである。業界全体の業績が下がる中、彼自身は業績を上げ続けてきた。だが彼が語るように、いくら彼自身の能力が高くとも、経済資本や組織内の権力には抗えない。サブカルチャーから

得た資本を持ってしても、組織や業界内では経済資本に抗うことができないのである。

渋谷ファッション業界も大きな変化を迎えた中で、彼は自己資金でビジネスを起し、仲間のサー人たちと新しい事業を始めようとしている。これは、組織や資本金の力に支配されて自分を正当に評価されずに非サー人の経営者と軌轢に陥る事態を避け、自分の資本を存分に資本として活かし切れる環境を仲間とともに目指すからであろう。²³

以上のようにサー人たちは渋谷ファッション業界において、自らがサークル界で得た資本をビジネスにも応用しているが、彼らの身体化したハビトゥスや文化、価値観は、時として非サー人の者との間に軌轢を起すことにもなる。彼らの社会関係資本や強い価値観は派閥を形成、助長する。また彼らの保持するサブカルチャーを通じて獲得した文化資本は、非サー人の者には共有されておらず、認識すらされないこともある。そして彼らの持つ諸資本よりも経済資本や組織の力学がまさるために、彼らの保持する資本の力は一定の限界をもたせられてしまうことすらあるのである。サー人たちが起業を目指す理由は、自らが身体化してきたハビトゥスや資本がひきおこす一般人との軌轢を避け、かつ自らが培った資本を最大限に活用しようとするからでもあるといえるだろう。

7. まとめ

以上本稿では、若者サブカルチャーで獲得した資本を、当事者たちがその後、関連するサブカルチャー産業界において活用していく様相を実証的に検証した。

従来の研究では、サブカルチャー関連産業界でサブカルチャーで獲得した資本がどのように経済的報酬に結びつくのか、また産業内部の微

細な権力関係に結びつくのかは、ソーントンも含め経時的・実証的に検証されていなかった。

そこで本稿は経時的な参与観察をもとに、ソーントンの述べる文化資本としてのサブカルチャー資本に加え、シゴト、ツヨメ、チャライ、オラオラといった、勤勉さと悪徳に結びつく文化資本、イベサーを通じて獲得した社会関係資本、象徴資本や経済資本が、金銭的報酬や内部の微細な権力関係にいかに関わり結びつくかを、事例を通じ実証的に明らかにした。

まずサブカルチャー資本と社会関係資本が、サー人たちに具体的にどう活用されているかを見た。サー人たちは渋谷ファッション産業界で、自らのサブカルチャーで得た資本をビジネスにも投入する。ソーントンの提唱したサブカルチャーにおけるふるまい、ファッション、知識などの身体化された文化資本は、サブカルチャー内部での尊敬やヒエラルキーのみならず、サブカルチャー関連産業界でも、彼らの尊敬や威信に関わり結びついていた。またマクロビーが指摘した社会関係資本も、この産業界での就職の機会やビジネスの協力関係に関わり結びついていた。すなわち、就職に加えその後の職業世界でも、サブカルチャー資本や社会関係資本は長期にわたって資本として機能してゆくことを実証的に明らかにすることができたといえるだろう。

またサブカルチャー関連産業界の構造は、サブカルチャーの界の構造と相同性があるため、彼らの得てきた文化資本と社会関係資本がそのまま適用できることを見出した。彼らが現役サー人時代に行った「シゴト」と呼ぶコミュニケーション活動は、サブカルチャー産業界で日々行うコミュニケーションとも結びつく。その中で求められる勤勉な人付き合いや上下関係、礼儀作法、こなれたふるまい、組織への滅私奉公の精神なども受け継がれており、彼らのシゴトを通じて獲得してきた文化資本、社会関係資本

が適用されていることがわかった。

次に、サブカルチャーで蓄積された、サブカルチャー特有の資本が、具体的に産業界でどう資本として機能しているかを確認した。ツヨメという新規性のあるものを見つける特性は、ビジネス上のトレンドを把握するセンスや利益、尊敬にも結びついていた。彼らの界ではチャライ経歴を経てきたうえで、組織内では禁欲的にふるまうハビトゥスが求められたが、それを内面化しており、産業界での信用と威信を手にしていった。

サー人としての文化資本、社会関係資本を持つことへの信頼は、彼らの象徴資本となり、雇用や出世、取引上の信頼にもつながっている。これらの資本を獲得してきた彼らとその他の者たちの間で、認識上のヒエラルキーが構成され、それが実際のヒエラルキーにも結びつき、一定の経済的報酬にも結び付くことも示唆された。

とりわけ、現役サー人時代にオラオラさを持っていた者たちは、そのオラオラな文化資本や象徴資本、社会関係資本を活用し、後輩や仲間を利用しながら非合法な方法で経済資本を手にし、豊富な経済資本を背景に企業規模を拡大してゆく。そして、実際に行うオラオラの行動と、オラオラという象徴資本により、サブカルチャー関連産業界のヒエラルキーで優位に立ち、搾取的な取引を行う傾向を新たに明らかにした。

このことは、社会規範から逸脱しているアウトサイダー、不良の集団文化という意味合いでサブカルチャーを捉えるならば、サブカルチャーで獲得し、関連産業界での収益や権力に結び付く資本は、従来示唆されてきた文化資本や社会関係資本にとどまらないことを示している。不良文化特有の文化資本、象徴資本や、それらと社会関係資本を通じて獲得できる経済資本

も、関連産業界における経済的な報酬や権力に結び付く資本としての大きな役割を果たしているのである。

しかしながら、本稿で見てきたように、サー人としての文化資本と社会関係資本、象徴資本が、つねに有利に機能するわけではなく、限界性がある点も指摘できるだろう。まず、彼らはサブカルチャー出身者であることにより、理不尽な搾取の構造に巻き込まれ続ける可能性があることが挙げられる。同時に、彼らの身体化したハビトゥスや文化、価値観は、時として非サー人との間に軋轢を起こす原因にもなり、彼らの社会関係資本や象徴資本、サブカルチャーの強い価値観は派閥を形成し、さらに助長することもある。

また、彼らの保持するサブカルチャーを通じて獲得してきた文化資本をはじめとした諸資本は高度でありすぎるがゆえに、サブカルチャーの文化資本をあまり持たない者には可視化されにくく、認識すらされないことにより機能を果たさない可能性もあるのだ。さらにサブカルチャーとしてのハビトゥスを内面化しすぎるがゆえに、サブカルチャーの美意識から反する状況に対して、脆弱性すら持つともいえるだろう。

そして、彼らの持つ資本以上に、経済資本や組織の力学により、上昇が制限されることもありえるのである。²⁴

以上が本稿で新たに明らかにした知見である。最後に本研究の課題について述べる。本研究の対象者たちは、経済的に裕福であり、学歴も高い傾向にある渋谷のサブカルチャー出身者たちである。また、サブカルチャー当事者時代から、自らの将来的な資本の適用可能性をある程度意識してきた若者たちが多い。本稿では、渋谷ファッション産業界という、サブカルチャー関連産業界に進む者たちの資本の適用についてみてきたが、彼らの進路は、サブカルチャー

関連産業界にはとどまらない。彼らが、サブカルチャーと関連する産業界以外においてもサブカルチャーで獲得してきた資本を活用しているかを明らかにすることを、今後の課題としたい。

付記 本稿は、筆者の一橋大学大学院学位論文の一部に新たなデータを加え、加筆修正したものである。

文献

- 荒井悠介, 2009, 『ギャルとギャル男の文化人類学』新潮社.
- , 2013, 「ユース・サブカルチャーズの卒業の変容—ギャル・ギャル男サークルからの引退を事例に」, 『年報カルチュラル・スタディーズ』カルチュラル・スタディーズ学会, 1, 199-211.
- , 2016, 「新自由主義と現代日本の下位文化—ブルデュー理論に依拠して」, 『一橋研究』一橋研究編集委員会, 185, 1-19.
- , 2017, 「社会的成功のため勤勉さと悪徳を求める若者たち—渋谷センター街のギャル・ギャル男ドライブ」, 多田治 (編著) 『社会学理論のプラクティス』くんぷる, 35-57.
- , 2019, 『渋谷ギャル・ギャル男サークルのエスノグラフィー—社会的成功のための勤勉さと悪徳資本』一橋大学博士論文.
- , 2021, 「Gathering文化からSharing文化へ—渋谷センター街のギャル・ギャル男ドライブの変遷」, 木村絵里子・轡田竜蔵・牧野智和 (編著) 『場所から問う若者文化』晃洋書房, 45-69.
- Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction: Critique Sociale du jugement*, Paris: Éditions de Minuit. (=1990, 石井洋二郎 訳, 『ディスタンクシオン—社会的判断力批判1.2』藤原書店.)
- , 1980, *Le Sens pratique*, Paris: Éditions de Minuit. (=1988-90, 今村仁司・港道隆 訳, 『実践感覚1.2』みすず書房.)
- , 1992, *Les Régles de l'art: Genèse et structure du champ littéraire*, Paris: Éditions du Seuil. (=1995-96, 石井洋二郎 訳, 『芸術の規則 I・II』藤原書店.)
- , 2000, *Les Structures sociales de l'économie*, Paris: Éditions du Seuil. (=2006, 山田鋭夫・渡辺純子 訳, 『住宅市場の社会経済学』藤原書店.)
- , 2000, *Propos sur le champ politique*, Paris: Éditions du Seuil. (=2003, 藤本一勇・加藤晴久 訳, 『政治—政治学から「政治界」の科学へ』藤原書店.)
- 藤田結子, 2017, 「国境を越えるデザイナー—ファッション界における境界と競争」, 藤田結子・成実弘至・辻泉 (編) 『ファッションで社会学する』有斐閣, 232-253.
- 北田暁大・解体研 (編著), 2017, 『社会にとって趣味とは何か—文化社会学の方法基準』河出書房新社.
- McRobbie, Angela, 2002, "Clubs to companies: notes on the decline of political culture in speeded up creative worlds", *Cultural studies*, 16(4): 516-531.
- Mitchell, Tony, 2003, "Australian Hip Hop as a Subculture", *Youth Studies Australia*, 22(2): 40-47.
- Muggleton, David, 2000, *Inside Subculture*, Oxford: Berg.
- 難波功士, 2007, 『族の系譜学—ユース・サブカルチャーズの戦後史』青弓社.
- 成実弘至, 2001, 「サブカルチャー」吉見俊哉編 『カルチュラル・スタディーズ』講談社, 93-122.
- 多田治, 2011, 『社会学理論のエッセンス』学文社.
- , 2017, 「主観を通じた社会・権力・資本—ブルデューの“象徴”の重要性」, 多田治 (編著), 『社会学理論のプラクティス』くんぷる, 25-34.
- 田中研之輔, 2016, 『都市に刻む軌跡—スケートボ

ーダーのエスノグラフィー』新曜社。

Thornton, Sarah, 1995, *Club Cultures: Music, Media and Subcultural Capital*, London:Polity.

注

- 1 ギャルとは、見た目としては、明るく脱色した髪、化粧およびカラーコンタクトレンズやつけまつげを用いた目の強調、日焼けした肌、肌の露出、派手なネイルの装飾をした女性が当てはまる。ギャル男とは、明るい髪色に日焼けした肌、暴力団関係者を意識した不良っぽい格好や、ホストやスカウトマンのようなファッションなどを好む男性を指している。これらは、おおよその行動様式も似通っていた。ただし、年齢や流行により様々なバリエーションが存在し、細分化していった。
- 2 「界」(champ)は「場」とも訳されることが多いが、本稿では「界」と表記する。
- 3 「サークル界」「渋谷ファッション業界」は「界」としての特性を持っているが、この名称は著者が名付けたものではなく、当事者の中で長年広く使用されている呼称である。
- 4 多田治はこの象徴資本と他の資本との関わりについて、以下のように指摘する。「象徴資本とは、様々な資本が主観的な認識・評価を付加されたもの、知覚カテゴリーに従って認知された資本である」(多田 2017:29)本稿でもこの解釈をもとに象徴資本という概念を使用していく。
- 5 田中の研究対象とする若者たちとは、出身家庭の経済状況や本人の学歴などにも違いがみられる。本研究の研究対象となる渋谷のイベサーの若者たちは、家庭の経済状況も標準以上に豊かであり、本人も私立の中高一貫校に通う若者や大学に進学する者たちも多い。また、サブカルチャーで獲得する資本が将来にどのように結び付くのかについて、自覚的な若者が多いことも、違いとして挙げられる。これらの違いによりもたらされる差

異については、別稿にて発表する予定である。

- 6 当初「イベサー」と呼ばれていたが、00年代後半以降、サー人およびギャル・ギャル男系ユース・サブカルチャーの者たちから「サークル」と呼ばれるようになった。「サークル界」も当初は「イベサー界」と呼ばれており、併用して使用されていたが、本稿では、「サークル界」と表記を統一する。
- 7 この渋谷ファッション業界は、ギャル・ギャル男ファッションの流行にともない、00年代後半までは業界としての収益も拡大しつづけていたが、その後徐々に衰退し、10年代半ばになると業界および企業の規模も縮小していった。また、サークル界も同様に衰退し、2017年に大サーは消滅、その後も高校生のサー人は数十名存在していたが、コロナ禍以降、活動を確認できていない(荒井2021に詳述)。
- 8 大規模サークル幹部クラスのケンゾウ(30代前半)が、2017年1月、元サー人の他社のプレス担当者に人を紹介することについて述べた発言。人を紹介することで報酬をもらえると言われたことについて。なお、元大規模サークル幹部クラスのリキ(30代前半)も2011年7月に、「君を紹介するっていうことは、俺の信用も君に預けるっていうことですからね」という発言をしているように、信用という言葉はこの業界で頻繁に用いられる。
- 9 元大規模サークル幹部クラス マサト(30代前半)2017年2月のフィールドノーツより。
- 10 元大規模サークル幹部クラス テル(30代前半)2010年9月のフィールドノーツより。
- 11 元大規模サークル幹部クラス テル(30代前半)2011年6月インタビューより。
- 12 元大規模サークル幹部クラス マサト(30代前半)2017年2月のフィールドノーツより。
- 13 元大規模サークル幹部クラス リキ(30代前半)の発言2010年4月のフィールドノーツより。

- 14 元大規模サークルメンバー タニガワ (30代前半) 2012年8月のフィールドノーツより。
- 15 このような、先輩後輩関係は渋谷ファッション業界では様々な形で見受けられる。元中規模サークル幹部クラスで、ガールズマーケティングを担当しているサキ (30代前半) は以下のように語る。「人のつながりとかも仕事の面でも助かっているよ、現役 (サー人) のころ全く知らなくても、サー人っていうと、お前もあの時間をかけたのだから。突然態度が変わって、お前後輩かって、先輩ってなって」2017年10月フィールドノーツより。
- 16 会社を大きくしたヒット商品の名称は、ヤスがギャルに受けそうな商品名を考えて考案したという。ヤスのサブカルチャーを通じた文化資本を活用しているといえるだろう。
- 17 2010年7月のフィールドノーツより。
- 18 ここで、リュウゴは非サー人の会社責任者に対し、梯子を外すようなことをし、後輩の面倒を見ることに向いていないと述べている、また他の元サー人社員たちからもリュウゴと同様の発言を多く聞き取った。だが、アルバイトの立場で関わった、元サー人たちからはむしろ慕われることが多く、「ケツを持つ」、面倒見が良い兄貴肌の人物であるというような、真逆の良い評価を受けている。この会社責任者が、問題を起こしてしまった元サー人を会社の利益を損なう可能性があるにも関わらず庇ったことや、他社のオラオラ系の元サー人の経営者からの要求をはねつけて会社と社員を守ったこと、普段から様々な機会に誘い自分たちの相談にのってくれたことなど、様々なエピソードを聞き取ることができた。そのため、このリュウゴの発言は、社員として関わった元サー人の意見として認識する必要がある。
- 19 元大規模サークル幹部クラス ダイジ (30代前半) 2017年5月フィールドノーツより。
- 20 元サー人が社長の会社に勤務する、高校時代からギャルとして渋谷に通い、頻繁にサー人と交流を持っていた女性 (20代後半) 2018年5月インタビューより。
- 21 このような、一般人との価値観の違いにより、辞めた例はほかにも見受けられる。元小規模サークルメンバーのアミ (20代後半) は、ある企業と10年以上関わり、ビジュアルプレスとして活躍しつつ、センスの良さで新たな企画を成功させてきた。離職を聞いた著者とのやり取りでは、以下のような言葉を述べた。「普通や常識という型にはめられることがやっぱりどうしても苦手で……引き続きギャルとして頑張ります」2020年7月フィールドノーツより。
- 22 読者モデル出身者などが主に担当する、プレスと企業のイメージモデルを兼務する役職。
- 23 リキはその後、自ら起業した。また発言で述べられていた元サー人たちとも同時にビジネスを始め、彼らのセンスと経験を活かしたサービスは、順調に複数の大手企業に取り入れられている。2021年11月フィールドノーツより。
- 24 このような状況を見ると、彼らがサブカルチャーで獲得した資本により、このサブカルチャーの関連産業界で大きく上昇するには、オラオラな方法で大きな経済資本を獲得し自ら起業することが、一つの合理的な手段として選択されていると捉えることもできる。
- (あらい ゆうすけ、本学科助教)